優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）

北方領土返還に向けて

京都府立鳥羽高等学校　３年　坪内　駿光

根室沖にある北方領土。それは１８５５年の日露和親条約により、日本となった島々だ。だが、１９４５年８月１８日、ソ連軍が侵攻し、９月２日のアメリカ戦艦ミズーリでの降伏文章調印後の９月３日に歯舞諸島を占領して、今もまだ不当に占領している。

北方領土全域で、福岡県や千葉県と同じ程度の日本固有の領土が他国の実効支配下にあるというのは、主権を持つ国家として、とうてい許せるものではない。領土、領海だけでなく、豊かな海洋資源なども同時に奪われている。国後島や択捉島は、その一つの島だけで、沖縄県の面積を軽く超えているのである。

北方領土の問題は、決して私たちと無関係ではない。日本は、北方領土以外に竹島でも領土問題を抱えている。ましてや、日本が実効支配している尖閣諸島や、中には、現実に沖縄や対馬といった日本人の住んでいるところを自国領と主張している国さえある。このように、すべての領土問題はつながっていると考える。一箇所であっても、一平方メートルの土地であっても、固有の領土を諦めて、他国のものと認めてしまえば、他の領土問題にも悪影響を与えるのではないかと思う。領土問題においては、絶対に譲歩することは許されない。それこそ、ある首相経験者の口癖であった「友愛」だけであってはならないのだ。自らの国の考え、根拠と基本方針を相手にはっきりと示した上で、交渉に臨まなければならない。それには、国民が領土問題に強い意識を持たなければならない。

毎年、北海道の中学生か高校生かが、日本の首相を訪れ、北方領土について請願書のようなものを渡しているということをインターネットで見た。しかし、今年は、忙しいという理由で、面会することができなかったとネットのニュースは報じていた。このことは、今の政権が北方領土への意識が低いと言われても仕方ないことだと思う。

北方領土は、歴史的にも国際法的にも日本の領土であるということは、疑いようのない事実である。京都は、日本の中程にあり、北方領土からは遠く離れている。また、竹島や尖閣諸島からも遠い。それだけに国境や領土という観念があまり感じられないと思う。それは、京都だけのことではないのではないだろうか。だからこそ、国民の関心を高めることが重要だ。

そして何よりも、早期返還を実現することが大切である。ロシアが北方領土の埋蔵資源、メタンハイドレードなどの開発を始めたり、交通網整備を本格的に始めれば、返還は、ますます難しくなっていく。国際的にも、ロシアが開発しているクリル諸島という認識が広がると考えられる。ロシアと政治的な交渉ができるのは、政府だけである。国民が声を挙げ、ロシアにその意思を示さなければ、交渉にすらならない。

優秀賞（京都市教育委員会教育長賞）

北方領土　－故郷をとりもどすために－

京都市立京都御池中学校　１年　山田　剛大

自分のもなのに他人が我がものというような顔をして使っている一。ロシアに占領される以前に北方四島に住んでいた人は、これと近い感情なのではないだろうか。とりかえしたくてもとりかえせないもどかしさや怒り。しかも、そのとられたものは自分の故郷なのだから、さぞかし辛いことだろう。

一九四五年には四島にあわせて一万七千二百九十一人もの人々が住んでいたという。不便ながらも島ではみんな生き生きと暮らしていた。しかし、悲劇はおこる。ロシアに占領され、住んでいた人は島から強制退去を命じられた。それ以来、四島へは特例を除いてビザを取得しないと入れなくなってしまった。例え、墓参りへ行くときでさえもだ。そんなことがあっても良いのだろうか。もし、私の故郷が占領されたら・・・。想像するだけでぞっとする。故郷を奪われるということは、大切な場所も思い出も、土地に対する愛さえも奪われることに等しいと思う。残されるのは故郷を奪われた悲しみと、心にぽっかりと空いた大きな穴だけだ。

しかし、現在、北方領土問題を解決へと導くためにさまざまな取組が行われている。取組は大きく分けて二つある。

一つ目は啓発、署名運動などの一般人への呼びかけである。これは北方領土返還要求強化月間（八月）及び北方領土の日（二月七日）を中心に展開される。

二つ目は北方四島との交流だ。これには旅券・査証なしで訪問できるビザなし交流や四島自由訪問などが含まれている。

このように、私たちでも北方領土問題の解決に協力できることがたくさんある。私も是非、機会があれば参加してみたいと思う。

先程、北方領土返還要求強化月間と北方領土の日についてふれたが、知っている人はどれくらいいるだろうか。北海道に住んでいる人は別として、それ以外の人はあまり知らないのではないかと私は思う。私自身、知らなかったし、今回、北方領土について調べてみなければ一生知らなかったかもしれない。

人間、一人でできることは限られている。だから、私はもっと多くの人に北方領土について知ってほしい。故郷を奪われた人たちの魂の叫びを受けとってほしい。私が北方領土問題について知ってほしいのは、日本人に限ったことではない。この問題は世界的には、あまり有名ではない。ロシアの人でも知らない人が多いという。地図上でも表記は曖昧なものが多く、ロシア領として北方四島を処理している地図も少なくない。

私はこれから自分にできること、例えば署名活動・下級生に事実を教えるなどを、積極的にしていきたいと思う。

現在、元居住者で生存している人は、七千七百九十七人。
既に五四・九％の人が亡くなっている。一人でも多くの人に故郷の土を踏んでほしい。私はそう思っている。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

四島返還への第一歩

京都市立嵯峨中学校　２年　黒田　真衣

領土問題。この問題が起こる原因は、その土地の資源を得るためだとか、国の権威を高めるためだったりします。何にせよ、自国が他国よりも豊かになりたいという欲望のために起こってしまうのです。北方領土問題も同じです。歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島は水産物の宝庫で、また大自然の美しさは観光産業に活かすこともできます。こんな魅力的な島々ならどんな国だって自国の領土にしたいだろうとは思います。

しかし、ここに二つの事実があります。一つは「北方領土は日本人が自分たちの手で開拓し、そこにはずっと日本人たちが住んでいた」ということ。二つ目は「北方領土はたった一度も他国の領土になったことがない」ということです。それなのにロシアは太平洋戦争で日本が大敗して北方領土にまで手が回らないのをいいことに、勝手に日本人たちを追い出して占領しました。それは、日魯通好条約・樺太千島交換条約・ポーツマス条約という三つの条約を全て無視した行為であり、北方領土に住んでいた日本人の「自由に住む権利」奪うという、人間的にも許し難い行為です。私が北方領土問題で一番ロシアが酷いと思う点は、「そこに住んでいる人たちを追い出して、更にその人たちがパスポートとビザなしでは自分の故郷に帰ることすら出来なくしてしまった」という点です。幾ら自国が豊かになりたくても、そこに住んでいる人たちを追い出してまですることではないと思います。それで豊かになってもロシアの人たちだって、何となく罪悪感を抱いて決してとてもいい気持ちで暮らすことができないと思うのです。そんなことになるくらいなら、早いこと北方領土を日本に返還して、誰でも気持ちよく大自然のそばで暮らせるようにするべきです。

そのために私は、江戸時代の樺太のように北方領土を日本とロシアが共同で住めるようにしたらいいと思っていました。しかし、それでは政治的問題が発生すると聞きました。なので、万事上手くいくようにこの問題を解決するには、北方領土を日本の領土にし、ロシアの人々は日本国籍をとるなりすることが唯一の道だと思います。

北方領土に住んでいた日本人たちが、日本の国土して、日本から普通に故郷へ帰ることができるようになる日。それを実現するカギは、私たち日本人の一人一人の強い思いと政府間での粘り強い交渉を本気で進めることにあると思います。日露両国の人々が争い事なく笑顔で北方領土で暮らせることができるように、まず私たちからこの問題を理解し、そして政府に積極的にはたらきかけることが大切だと、私は思うのです。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

北方領土問題のバランス

宮津市立日置中学校　３年　吉田　達哉

「尖閣諸島映像流出」と、新聞にも大きく報じられています。僕も嫌になるほど、その報道を見てきましたが、北方領土問題に関しても、ロシアとの間で大きな問題となっています。今になって、メドベージェフ大統領が北方領土を訪問したことが大きく報道されていましたが、この報道によって、北方領土問題について初めて知った国民も多いのではないでしょうか。僕は、北方領土問題について、あまり国民は関心がないような気がします。もっと多くの国民に関心を持ってもらい、多くの議論、多くの意見をみんなで交わしていけたらよいと思います。だから、まずは広く国民に関心を持ってもらうことから始めたらいいのではないかと思います。

次に、アメリカとの連携を強くして、北方領土問題について協力を求めるべきだと思います。実際、アメリカの地図では、北方領土はロシア領として処理されています。アメリカだけではありません。ほとんどの国がロシア領として処理しているのが現実です。これから、日本の首脳や政治家は、会議で各国の首相や大統領などと会うでしょう。もっとアジア以外の国々にも北方領土が日本のものだということを主張していかなければならないと思います。

また、日本が自信を持って主張していかなければならないことは、日ソ共同宣言についてのことです。この内容の中に、「平和条約を結んだ後に、歯舞群島、色丹島を日本に引き渡す。」とありますが、５０年以上が経過しているのに、未だに平和条約を結んでいないのです。ここをもっと徹底的に主張していくといいのではないかと思います。時々、北方領土に関するニュースを見ていても、総理は、「領土は日本のものです。」としか言っていないような気がします。もっときちんと理由を述べて強い姿勢でロシアと交渉に当たってほしいと思います。

今、日本は、外交関係で様々な問題があり、なかなか解決するのは大変だと思います。だから、この状況を見て尖閣諸島や北方領土などが狙われているのだと思います。今こそ踏ん張ってほしいものです。日本は、貿易などの国交を通して他国との関係をよくしていかなければならないと思います。だからこそ、何としても領土問題は解決してもらい、経済発展につなげていってほしいと思います。

国同士の友好関係も保っていかなければなりませんが、主張するときは、強く、はっきりと主張していかなければなりません。バランスのよい解決をしてほしいと望んでいます。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

意識の差　無関心な私たち

京都市立西京高等学校付属中学校　３年　竹内　美晴

日本という国は小さく、資源が乏しい上に列島である。列島というからには無人の島もあり、その間を海が隔てているわけで、そこに管理の難しさが一つある。他国との領土問題はそのような無人の島をめぐっている。資源がある島ならばなおさらで、今も竹島や尖閣諸島で対立が続いているのは周知の事実だろう。

領土問題の中でも解決がかなり遠いと私が思うのが、北方領土だ。先に例に挙げた二箇所とはまた性質を異にしている。なぜなら北方領土は一時期ロシアが占領しており、その時人が移住してきているからだ。住民がいる島ということは、当然議論に彼らが深く関わってくることでもある。一度住んでしまったなら動きたくないし、既に移り住んだ人々の世代は交代していて、北方領土が故郷となった若い世代もいる。彼らの大半は定住を望んでいるし、ロシア政府も北方領土はヤルタ会談で認められた領土だと主張している。

一方日本はというと、以前島に住んでいた人々は老いており、彼らの子孫は本土などで生まれ育っている。島の返還は望んでも、島への帰省を望む人々はロシアのそれよりも少ない。一番意見を出す権利を持つ島の元住民とその子孫の島への強い執着は全体として見るとあまり見いだすことはできないように感じる。その点で日ロの執着・熱意の差がある。日本政府は戦後北方領土の返還をロシア側に求め、交渉を続けてはいるものの、やはりまだまだ解決への道のりは遠いのが現状だ。

問題の解決のためには、まず私たちの意識を変える必要がある。縦に長く横たわるこの国の最北端の先という地理的な距離は埋められないが、関心をもち、調べ、自分自身の意見をもつことは世代が交代してしまっていてもできることだと思う。私たち一人一人が自分で導き出した答えをしっかり持つことができれば、その知恵を結集することが可能になる。そして領土問題の解決へ一歩前進できるはずだ。それは他の領土問題についても言えるだろう。

大切なのは愛国心のみや感情のみで考えてはいけないことだと思う。客観的で公正な信用できる資料をよく吟味し、メディアに踊らされることなく、情報を分析することだ。

日本は世界の中でも最も安全で平和な国の一つだとよく言われるが、その環境の中で日本人は少し平和ボケし、無関心な人が増えている。領土問題は資源の問題にも深く関わるので、必ず私たちにも影響を及ぼす。日本人全員が北方領土などの問題についてよく考えていくべきだと思う。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

私たちと北方領土

宮津市立養老中学校　３年　泉　梨沙

私たちが住んでいる日本。ここには竹島、尖閣諸島、そして北方領土といった多くの領土問題を抱えている島々がある。これらは、日本が主権を持っているが、最近、この領土に関するニュースが多く流れている。

十一月一日、ロシアのメドベージェフ大統領が北方領土の一つである国後島を訪問した。第二次世界大戦の直後、旧ソ連が四島を占拠して以来、首脳としては初の北方領土入りとなった。

その一ヶ月後の十二月二日、これに対して危機感を募らせた元島民や返還運動関係者、国会議員ら約５００人が東京・銀座でデモ行進を行った。この運動に参加した人々は、どのような気持ちで参加したのだろうか。北方領土が占領されてからずいぶん時間が経った。しかし、どんなに長い時間が経とうと、元島民たちにとって、「ふるさと」の存在はとても大きく、決して忘れることのできないものだ。自分が、もし同じ目にあっていたら、と考えると、元島民の方たちの苦しみや怒りが少しわかるような気がする。

北方領土を追い出された日本人は、約１７０００人。元島民の人たちは、ずっとふるさと・北方領土の返還を求めている。しかし、「歳月は人を待たず」という言葉のとおり、時間は、あっという間に過ぎる。そして、多くの元島民は、自分のふるさとが返還されるのを見ることができないまま亡くなっている。

今の日本では、北方領土の返還は、元島民だけの願いではなくなってきている。私が住んでいる京都府でも、北方領土返還要求運動は行われている。１９８２年９月３日、京都商工会議所講堂で、それまで別々に北方領土返還要求運動に取り組んでいた青年、婦人団体など１３の民間団体が一つにまとまって運動を展開する必要を話し合い、府民会議を結成した。毎年、２月７日の「北方領土の日」を中心に市民の集いを催して、北方領土についての映画を上映したり、講演会を行ったりしている。京都府だけでなく、他の場所でも様々な活動をしている。

では、なぜいろいろな活動をしていても、北方領土の問題が解決しないのだろうか。それは、日本とロシアがもっと真剣にこの問題に向き合おうとしていないからではないだろうか。日露間での主張が違うということが大きな原因となっている。ならば、しっかりと話し合い、両国が納得できるようにすればよいのだ。

私は、今まで北方領土についてあまり詳しいことは知らなかったし、自分には関係ないことだと思っていた。しかし、北方領土は日本のものなのだから、日本国民みんなで守っていくことが大切になってくる。自分には関係ない、という考えを捨てる。そうすることで、一歩でも前進できると思う。国民一人ひとりが気持ちを一つにして、問題を解決していくことが大切なのだ。

優秀賞（京都新聞社賞）

知る義務がある

京都市立北野中学校　３年　田口　千裕

十一月一日、ロシアの大統領が北方領土を訪問した。各新聞でも大きく取り上げられていたが、私は特に何も思わなかった。それはロシア側も自国の領土だと認識しているのだから仕方ない、と思ったからだ。でも、一番大きな理由は、北方領土について何も知らなかったからだと思う。　私が北方領土問題で一番驚いたのは、日本の領土だという根拠がしっかりあったことだ。日魯通好条約や樺太千島交換条約でも北方領土がロシア領であることは全く示されていない。日本はこれらの条約を根拠に北方領土が日本固有の領土だと主張している。私も、この条約はロシア側が、北方領土が日本の領土であると認めていたことを示すと考える。しかし、現在、ロシアは北方領土をロシアの太古からの領土だと主張している。この主張は元々北方領土にアイヌ民族が住んでいたことを考えれば通らないのではないだろうか。

また、北方領土返還を願っている人がたくさんいることも知った。何も知らなかった自分との温度差に驚いた。元島民の人たちは、自分の故郷を追われ、散り散りに暮らしている。しかし、その人たちの数と同じだけのロシアの人が、今、北方領土に住んでいる。だから、安易に返還だけを要求するのは間違っていると思う。

私はロシアの人も、日本の人も北方領土で暮らせるのが一番良いと思う。でも、そうなった時に住民が気持ちよく暮らすためには、やはり主権を明確にしておく必要があると思う。だから、主権がはっきりしていない地域を大統領が訪問するのはおかしいと今は思う。元島民の人にとって大統領の訪問は、悔しく、悲しい事だっただろう。国どうしの争いが国民どうしの争いに発展すれば、問題の解決は難しくなるのではないだろうか。

私が感じた、自分と返還要求をしている人との温度差はたくさんの人に当てはまると思う。私のように何も知らない人も多いであろう今、大統領の訪問は領土問題に目を向ける良い機会になったのかもしれない。

四島の返還を実現するには、国民と政府が一体となって行動していかなければならない。そのためにも国民には両問題を知る義務があり、政府は国民へ働きかける必要がある。これからは、国民が日本の領土であるという意識を高めると同時に、日本とロシアの両面から問題を考えなければならない。今、北方領土に住んでいるロシアの人たちを元島民の人たちと同じ目に遭わせないためにも。

優秀賞（京都新聞社賞）

北方領土問題について

綾部市立豊里中学校　２年　大槻　佳奈子

北方領土とは、日本の領土でありながら、ロシアに不法占拠されている島々のことです。

もともと日本は、ロシアよりもずっと昔から北方領土とかかわってきました。その頃のロシアの地図には、北方領土は、日本の国としてかかれています。不法占拠が始まったのは第二次世界大戦直後です。ソ連軍は、当時の条約を破り、日本の北方領土を攻撃、占領しました。北方領土の歴史を見ると、北方領土は、日本のものであるはずです。地図を見ても、北海道の納沙布岬から歯舞群島まで３．７ｋｍしか離れていません。

この北方領土の水域で漁をしていて、ロシアからの銃撃によってけが人が出たり、船が沈没してしまったりしたこともありました。２００６年には、日本の漁船がロシアから銃撃を受けて拿捕されました。このとき、一人の乗組員が死んでしまったのです。北方領土がロシアに占拠されたために死者やけが人が出ているのです。これはとても大変なことだと思います。これ以上、犠牲者を出さないためにも、少しでもこの領土問題を解決してほしいです。

占拠された当時、島には１７２９１人の日本人が住んでいました。半分の人々は、ソ連軍の厳しい監視の中を逃げてきました。それ以外の人々は、島に残りましたが、ロシアによって引き揚げさせられたのです。このとき、島から脱出した人たちは、自分の家や土地を捨てて逃げなければいけませんでした。もしも、自分が同じ状況で故郷を捨てなければいけなかったら、簡単に決断はできなかったと思います。島の人たちは、本当に辛かったはずです。今、その人たちは、北方領土でない、どこかで普通に暮らしています。でも、そこは、その人たちの故郷ではありません。

私は、お盆には父、母のどちらの家のお墓にもお参りをしてきました。これまでも、毎年してきました。でも、故郷を追い出された人たちには簡単にはできません。私が今住んでいるところは、私の故郷です。ここは、私が将来大人になっても、いつでも帰ってくることができます。でも、北方領土を追い出された人たちは、故郷をロシアに奪われました。故郷に帰るということが簡単にできないのです。

北方領土問題によって、日本はたくさんの被害を受けました。北方領土問題は、少しでも早く解決しなくてはいけません。でも、北方領土からロシア人を追い出し、もう一度日本人が住むことは解決ではないはずです。今、北方領土には、約１７０００人のロシア人が住んでいます。家を持ち、子どもは学校へ行って勉強をし、私たちと同じように生活しています。そこがその人たちの故郷なのです。この人たちを追い出せば、いくら条約を守り、武力を使わず、正しいやり方であっても、昔のロシアと同じことを日本がすることになるのです。

日本人とロシア人が同じ島で平和に暮らすこと、それが私の考えたこの問題の答えです。

優秀賞（KBS 京都賞）

私が考える「北方領土問題」

京都市立洛北中学校　３年　藤　小百合

現在の日本にはいくつかの問題がある。その一つが「北方領土問題」である。北方領土問題とは、第二次世界大戦の末期、日本がポツダム宣言を受諾し、降伏の意図を明確に表明したあとに、ソ連軍が北方四島に侵攻し日本人島民を強制的に退去させ、現在もなお不法に占拠し続けていることをいう。

私が今回北方領土について関心をもったのは、テレビで元島民の方のドキュメンタリーを見たことがきっかけである。自分たちの故郷が突然他国によって占領され、住み慣れた土地にもう一生戻れない悲しみは、私たちには計り知れないほどの想いである。しかし、ソ連の占領から早六十五年が経ち、元島民の平均年齢は七十六歳をこえている。一度も故郷に帰ることができないまま亡くなられた方も多い。現在返還運動をされている方も、もう若い人ばかりではない。そんな時だからこそ未来を作っていく私達若者が、
島民の方々の意思を受け継いで、より活発な返還運動を推し進めていかなければならない。

ただ、このことについて気になることがある。一つめは「北方領土問題の風化」である。普段生活していても、返還運動などのニュースはほとんど聞かず、新聞でも北方領土問題の記事を目にすることはない。これでは日本人ですら、北方領土問題を知らない人は多数いるのではないだろうか。いま一度、国民一人一人が、身近な問題として認識することが必要である。

そしてもう一つ気になることは、現在北方領土に住んでいるロシアの人々が、北方領土が自分たちの故郷だと、強く思いはじめていることである。確かに占領したのは六十年以上も前のことであり、若い人たちならば自分たちの「故郷」となっているのは不思議ではない。もし日本に北方領土が返還されたとしたら、ロシアの人たちの中にも、六十五年前の元島民の方と同じ想いになる人は必ずいるであろう。北方領土問題を平和的に解決するには、こうした様々な視点から総合的に考えることが重要になってくる。そのための第一歩は、日本とロシアの国民が北方領土への正しい理解と認識を深めること。政府レベルでの交渉はもちろん必要だが、国民レベルでの民間外交という方法も国内の世論を高め、相互の理解と関心を深めることに役立つであろう。また日本人が力を入れている環境エネルギーやハイテク産業などの技術面での協力も、解決への糸口につながるのではないだろうか。

北方領土問題は元島民の方ばかりが頑張るだけはでなく、日本人全体が一つとなり解決に向かわなければならない問題である。一人一人にできる事は小さなことだが、自分たちの問題としてとらえ、多くの人に伝えていくことが最も有効な方法になる。私も北方領土の今後に関心を向けながら、伝えるという身近にできることから取り組んでいきたい。

優秀賞（KBS 京都賞）

北方領土とわたしたち

南丹市立園部中学校　３年　岡　英里奈

北方領土は、日本のものだと私は思う。日露通好条約で、四島は千島列島に含まれていない。それに、太平洋戦争で日本とロシアは日ソ中立条約を結んでいたのに、それを破って終戦間際に戦いに加わり、北方領土に侵攻したことにも納得がいかない。しかし、ロシア側からしてみれば、好漁場で資源豊富な暮らしやすい、そんな場所を今更手放したくないだろうし、私も、そんな土地なら争いになっても絶対自分のものにしておきたい。

私には双子の弟がいる。二人は、小さいときによく一つしかないおもちゃを取り合ってけんかをし、泣くことがあった。毎回収拾のつかないけんかに半分仲裁をあきらめていたが、彼らはそのうち解決策を自分たちで発見したようだった。「一つしかないものは、二人のものにしよう。」

北方領土返還の交渉がこれほど長引き、解決に至らないのは日本・ロシア双方の主張があるからだと思う。両国ともに相手に譲れない事情がある。しかし、このままでは何も変化のないまま年月が流れていき、日本側に不満が募り続ける。仮に強引に日本に北方領土を返してもらっても、ロシア側に不満が残るだろう。争いというのは、ちょっとしたことや日頃の不満の積み重ねで起こるのだが、両土問題となると、いつその不満が爆発し、戦争という最悪の解決方法に至ってしまうかわからない。だから、私は次のように考える。

「北方領土を両国の交流の場にしてみてはどうだろうか。」というものだ。なぜなら、世界ではもうすでに同じようなことをしている地域もあるからだ。南極大陸である。南極大陸にも豊富な地下資源があるが、最初に到達した一国が支配するのではなく、全世界共有のものとして調査・研究されていると聞く。また、現在進められている宇宙開発においても、それぞれの国が技術を出し合っている。将来、もし月に住むことが可能になった場合にも、月は共有のもの、みんなのものという考えが大切になってくる。自国の利益ばかり追求していては、研究も進まないし、争いを生むばかりだ。

北方領土問題を考える中で、私は色々なことに気付かされた。これからの世界に必要なのは「世界全体の利益」を考える視点だ。地球温暖化の問題、貧困の問題、感染症の問題。今の世界には、一国だけの努力では解決できない問題がたくさんある。言い換えると、一国の利益ばかり優先しては、解決に至らない問題をたくさん抱えているということだ。だから、北方領土の問題をそんな国際協調の出発点の一つにしてみたらどうかと考える。勿論、そんなに簡単にいかないことはわかっている。しかし、以前私の弟たちがしたように、大切なものだからこそ二人で使おう、分かち合おうというこの方法が最も解決に近いのではないかと思うのである。